

メーサイ市の看護師、1カ月の視察を終え帰国

タイのメーサイ病院から日本の医療を視察するために来日していた、看護師のチャトカモル・タマカットさんとナアワデー・カンカイさんが、約1カ月の視察を終えて4月10日にタイに帰国します。1カ月の視察の中で感じたことなどをうかがいました。



トウさんことチャトカモル・タマカットさん（32歳）
メーサイ病院の救急看護師として勤務しています。1998年にメチャイウィッタヤコム学校を卒業し、パヤオのボロマラジョナニ・看護カレッジを卒業してメーサイ病院の看護婦になりました。

救急看護師になるため、ほかの病院で4カ月の研修をし、救急病棟の看護師となりました。救急病棟では10年間の経験を持ち、後輩を指導する立場にもあります。

メーサイ病院では、メーサイ市とその周辺の約10万人の人たちを対象として医療活動を行っています。日本の119番に当たる1669番にダイヤルすると、メーサイ市とその周辺地域ではすべてメーサイ病院につながります。電話に対応するのは看護師で、搬送されてきた患者や外来患者の初期治療も看護師が行います。

メーサイ病院では約120人の看護師がいますが、救急看護師は22人です。日本とタイの制度の違いから、タイでは経験や資格を積み重ねた看護師が投薬や注射も行うことができます。日本の救急医療を視察しましたが、タイでは看護師がとても大変と聞いていましたが、日本では医師の負担がとても大変と思いました。

日本の医療現場で一番印象に残ったのは、患者さんに対するきめ細やかな配慮です。プライバシーに対してはタイでも守っていますが、日本は患者さんの個人情報にきめ細かく配慮していました。

消防本部に視察に行った際、司令室を見学しました。119番が入ると、ピンポイントで電話をかけた場所がモニターに出てきます。タイではまだそのシステムはなく、1669番でかかってきても患者さんのいる場所が分からずに、手遅れになるケースもありました。メーサイ地域では今、救急医療のトレーニングを行い、救助員を育てています。

タイでは医師が少なく、看護師に負担となり、看護師が不足するという状況を作っています。外来の患者さんも救急搬送された患者さんも同じ扱いで、とても長い時間診療まで待つケースも多いです。救急のシステムを構築して、スムーズに患者さんを受け入れたいです。



チェリーさんことナアワデー・カンカイさん（29歳）
メーサイ病院の麻酔科看護師として勤務しています。2000年にメチャンウィッタヤコム学校を卒業し、ランパンのボロマラジョナニ・看護カレッジを卒業してメーサイ病院の看護婦になりました。

4年間、大学で看護師の勉強をし、メーサイ病院で2年間、産科の看護師として働きました。その後、バンコクの病院の麻酔コースで1年間勉強し、麻酔看護師の資格を取得しました。

メーサイ病院にいる約120人の看護師で、麻酔看護師の資格を持つのは2人です。注射などの麻酔行為は医師しかできないですが、資格を取ったことで薬などを使った麻酔などを行うことができます。

日本の手術なども視察しましたが、日本では一つの手術に多くの医師が取り組んでいます。タイでもバンコクにある大きな病院では、多くの医師が一つの手術を行うこともあります。メーサイ病院では一つの手術に医師1人、看護師2人の手術チームで執刀しています。

日本の医療でとてもいいと思ったのは、医療器具が手術室の中に豊富にそろい、すぐに使える状態で置いてあることです。メーサイ病院では、手術器具などは別棟に保管しており、手術のたびに必要だけそろえるという方法を取っています。日本の手術器具は、手術室のすぐそばで豊富に取り揃えられ、必要なものがいつでも使えるという患者さんにとってとてもいい環境を作っています。

麻酔看護師の資格を取ったきっかけは、産科の看護師をやっている時に、もっと高いレベルの勉強をしたいと思ったからです。

看護師が麻酔まで行う背景には、タイの医師不足がありました。麻酔医が少ない現状で、麻酔を扱うことができる看護師を育てようとしています。私はこれからも脳麻酔や心臓麻酔など、もっと専門的な勉強をしたいです。病院スタッフはこれからますます専門性が必要となってきます。専門性を深めていき、メーサイ病院のキャパシティを広げていきたいです。

平成27年4月7日